

# 政治研究結果報告書

— 政治研究助成 —

西暦 2024 年（令和 6 年）2 月 14 日

一般財団法人 櫻田 會  
理事長 増田 勝彦 殿

研究者 成蹊大学法学部教授  
宮崎 悠

第 41 回（令和 4 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

戦後ポーランド文芸にみる歴史の記憶とナショナリズム  
Memory, Literature and Nationalism in Post-War Poland

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

This research focused on several aspects of the Polish nationalism after the World War II. The Polish-Lithuanian Commonwealth was once a multi-ethnic political body until the Partitions of Poland at the end of the eighteenth century. If we share Jane Burbank's terminology, we can call the Polish-Lithuanian Commonwealth an eastern European empire. This is why the reconstruction of the Polish state in 1919 forced the former "multi-ethnic" society on a path towards a deep and radical transformation. As a result, the main political concepts changed their significations rapidly. How did people envisage the word "Pole (to be a Pole)," "Commonwealth," or "homeland" before and after the independence of Poland? By focusing on the changing meanings of these concepts, we will find a serious gap between the imagined "new state" and the reality of interwar Poland. In other words, the multi-ethnic society, which was composed of not only Poles but also Ukrainians (Ruthenians), Jews, and other minorities, could not transform itself into an "ideal nation-state for Poles" at once. This research focused on the self-image of these minority groups by examining Jewish and Polish literature and films during and after the World War II.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

本研究は、ナショナリズム研究、国際政治史研究の観点から、ポーランドの文芸に現れる（または描かれない）多文化的社会の記憶が、第二次世界大戦後に活躍した表現者達の作品にどのように描かれてきたのか、その変遷を検証した。近現代のポーランド・ナショナリズムはその出来事が起きた時点での文脈をこえて、後世に意味を加味され、「活用」されてきた。また、独立 100 周年の節目や国民的規模の災厄を契機に「現時点」における社会の倫理基準が

変化し、ある出来事や歴史上の人物に対する評価が次第に変化する場合があります。一例としてドイツ騎士団とポーランド＝リトアニア連合軍によるグレンヴァルトの戦い（1410年）は、近現代を通じゲルマン対スラヴという広義の民族間の戦いへと敷衍され、ポーランド分割期から第一次世界大戦まで、現状を解釈するための枠組みとして繰り返し呼び起こされてきた。ポーランドとドイツがともにEU加盟国となって以降は、それぞれのナショナリズムの文脈文脈においてグレンヴァルトの戦いが援用されることは少なくなっているが、両国・社会およびEUとの関係の変化により今後どのように解釈が変化するのが注目される。

#### ※研究経過と結果の概要（以下の欄に35行以内(1500字程度)にまとめる）

2023年7～8月に国内（主に北海道大学附属図書館、同大スラヴ・ユーラシア研究センター図書室）での文献調査を行い、その上で現地調査を行った。ポーランド社会の「建国の父」達への評価の変遷や、多文化（多宗教、多言語）社会に対する評価の変化について、2010年代以降に新しく設置された研究機関や博物館、記念碑等を視野に入れ検討することとした。

中間報告として、第73回西洋史学会（5月21日、於名古屋大学）小シンポジウム4「ロシア・ウクライナ戦争と歴史学」で、池田嘉郎氏・板橋拓巳氏・中澤達哉氏の報告へのコメントを行い、現代史におけるポーランド＝ウクライナ関係を振り返り、2022年の戦争が始まってからのウクライナ難民受け入れ、それに伴うポーランド社会の変化について、また、対ロシアでの協力関係の深まりにも関わらず右派～保守層の間で関心が高まるヴォウイン事件についての歴史認識問題、（記念碑や映画といった形での）ヴォウイン事件の作品化について補足説明を行った。

9月にはポーランドでの資料収集・調査を行った（出張期間9月3日～13日）。ワルシャワ大学図書館および国立図書館で近現代ポーランド＝ユダヤ史の資料、とくにポーランド・ナショナリズム関連の文献閲覧を行い、ユダヤ歴史研究所（ワルシャワ）で近現代ポーランド＝ユダヤ史（とくにワルシャワ蜂起の伝わり方）に関連する文献・資料を閲覧した。また、ユダヤ史博物館では戦後の文学・イディッシュ演劇・映像作品に関する資料の閲覧を行った。新設のピウスツキ博物館、改装後の独立博物館でナショナリズム関連資料の閲覧を行なった。

このほか、ビャウォヴィエジャ国立公園において、地域の歴史や、ベラルーシとの国境で起きている難民危機や救援活動について、「壁」の建設について聞き取りを行った。

現地調査・研究結果の小括として、2023年度日本政治学会（於明治大学・駿河台キャンパス、9月17日）の公募企画「『移動する人々』をめぐる政治学」（司会：佐藤高尚氏、報告：山田竜作氏、李曉東氏、宮井健志氏、討論：平石耕氏、宮崎悠）において、ポーランドとウクライナ間、ベラルーシ間で生じている難民問題の現状と、「壁」の建設をめぐるポーランド社会の反応について、歴史的背景を説明しつつ論点の提起を行なった。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

今回の研究の成果報告として、「変容するポーランド＝ウクライナ関係と歴史認識問題——  
ヴォウイン事件八十周年を手がかりに」を寄稿した（2024年に刊行予定）。

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。